

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫



◆◆◆ No.0787 ◆◆◆

24/05/01

【 今年のドル/円、最低でも「ドル強気」の一年に 】

東京市場が休場となった4月29日に、ドル/円相場は1990年4月以来となる160円台を示現した。私事になるが、筆者が大学を卒業し為替の仕事にはじめて携わったのが1990年のこと。つまり、1ドル=160円までは辛うじて「以前に見たことのある光景」だが、それ以上になると業界歴30年を超える筆者でさえ「未知の領域」になる。足もとは、当局による円買い介入と思しき動きもあり、156-158円程度に押し戻されているものの、ドル高という基調に変化はなく予断を許さない。果たして、このあとといったどういった値動きをたどるのだろうか。

◎「悪い円安」論はびこるが、円安は本当に「悪」なのか!?

筆者は4月17日付のレポートで、年明けなどに予想した自身の年間レンジ見込み「155円」に接近していることを踏まえたうえで、「今年がドル強気相場だった場合の想定年間レンジは133.86-159.22円」と指摘した。詳細については2週前の同レポートか、原本である「年間変動率」について報じた1月17日付のレポートを参照していただきたい。

いずれにしても、今年のドル/円相場は筆者の予想した「ややドル高」ではなく、最低でも「ドル強気」だったことが名実ともすでに確認されているわけだが、さらに言えばヒョッとすると今年が「ドル最強」相場の一年である可能性も残されている。ちなみに、前述した1月17日付のレポートによると、今年が仮に「ドル最強」相場であった場合の予想レンジは「138.08-163.44円」だ。ここ数週間の地合いなどを考慮しても、決して到達不能というレベルでないところは非常に気に掛かる。

先でも指摘したように、足もとは政府・財務省介入と思しき動きから急激なドル高・円安は一旦落ち着いているものの油断は禁物だろう。ドル高再燃の動きからドル/円はまたもや160円突破となり、そして定着。さらに、当局介入などと対峙する格好のなか、163円や165円に向けてドルが続伸するという値動きをたどらないとも限らない。筆者をはじめ、ほとんど予想していなかった「ドル最強相場」の一年についても、リスク要因として頭の片隅には是非とどめておいて損はないと思っている。

一方、そうしたなか日経新聞をはじめとする、一般的なメディアで気になる論調をたびたび目にすることが多くなってきた。それは先々の景気悪化を憂う「悪い円安」論とも言うべきものと、いまひとつは「円安進行で国力が低下する」ーとの話だ。

しかし、思い出していただきたいのは、筆者が為替業界に入った1990年、前述したようにドル/円が前回高値160円を付けた同年4月といえばちょうどバブルのピーク(株式市場的には1989年末)。つまり、円安進行時の日本景気は「良すぎるほどよかった」のは筆者の気のせいだろうか。逆に、1990年4月にドルは高値を付けたのち1995年4月の79.75円、ちょうど半値に向けて5年間の下落をたどるわけだが、この過程の日本の景気は果たして良かったのか。そして、1ドル=100円を切るという円高進行の流れのなかで「国力は果たして上がっていた」のだろうか、個人的には甚だ疑問に思わなくはない。ほかに色々あるのだが、単にこれらだけでも「円安」は悪者と言えないと考える。

もちろん、円安だけでなく円高もそうだが、メリット・デメリットが確かに両方存在する。片一方しかないというものは有り得ない。そうした意味において、円安にもデメリットが少なくないのは事実だ。しかし、それを上回るだけのメリットもあり、一例として日本メーカーの国内回帰が促進されたり、海外からの国内投資が増えたりすることは無視できない。

半導体ファウンドリー世界最大手、台湾TSMCの熊本工場が先日完成。2月24日に開所式が行われたことは記憶に新しいが、同社が円安により今後多大な「輸出差益」を期待できる反面、中長期スパンから考えて国内半導体メーカーは最新の製造技術が学べることが大きなメリットとなろう。

過去のレターを読んで貰えればわかるように、筆者は現在のようなドル高・円安が長続きするとは思っていない。しかし、それでも仮に円安がある程度長期化してもいいような産業構造の変化などに目を向け、是非ともポジティブな思考へと頭を切り替えていただければと思う。(了)

